

特集

おおどもかめたろう

大友亀太郎の

そくせき 足跡

1872（明治5）年、大友堀（創成川）の西から北東を望む。林の右奥が札幌村の方角となる。

おおどもかめたろう 大友 亀太郎

1834（天保5）年、相模国足柄下群西大友（現在の神奈川県小田原市）に生まれました。大変な勉強家で、村の財政や土木事業を任されるほど村の人々に信頼されていた亀太郎は「人の一生は、社会のために尽くすべきである」との思いを強くし、22歳の時に近郷出身の偉人で、当時の農村復興の権威でもあった二宮尊徳の門をたたき、さらなる土木技術の習得に励みました。



明治を迎える少し前、当時の日本は国内の政治や外交、また、経済も先行きの見えない混乱した時代でした。そのような中で、諸外国の影響力に対抗するため、江戸幕府から命を受けて幕臣大友亀太郎が石狩の地に足を踏み入れたのは、一八六六（慶応二年）のことでした。

※幕臣…江戸時代における、将軍に直接仕える家臣のこと。亀太郎は農民出身でしたが、幕府に取り立てられ武士となりました。

えいどばくふ 江戸幕府からの命

おてさくば 御手作場の造成

亀太郎一行は数々の困難を乗り越え、伏籠川上流地域（現在の北三条東一六丁目、現在の札幌村郷土記念館の周辺）にたどりつきました。将来の交通に最適な場所であると確信した亀太郎は、早速農場（御手作場）の造成に取り掛かります。当時における最高水準の土木技術を駆使し、道路、橋の整備を行い、農場のための用水路を引いて元村（後の札幌村。札幌村は昭和三〇年に札幌市と合併します）を造り上げ、現在の東区の原型をつくりました。

また、亀太郎はその後、本州からこの地にやって来た農民を農業技術者として待遇し、農作業に必要な農機具や食料、金銭を支給するなど、農民が作業に専念できる環境づくりを力を尽くしました。

札幌の基準線と なった大友堀

おおもどもぼり



↑明治初期の大友堀。どの辺りを撮影したものかはよく分かっていません。

亀太郎が手掛けた事業の中で、特に後世に語り継がれているものが用水路の建設です。

用水路は、豊平川の支流から水を引き、現在の中央区南三条東一丁目付近からまっすぐ北へ進み、北六条東一丁目から北東へ方向を変え、御手作場へ流すもので、最終的には現在の大友公園のあたりを流れていた伏籠川に注ぎました。

用水路の規模は長さ約四^キ、幅約一・八^メ、深さ約一・五^メ。一日あたり五〇人ほどの人員で、わずか五カ



↑亀太郎が使用した測量器。当時において、最高の精度を誇りました。

